

「こどもホスピス」における利用者支援と今後の発展についての考察

1933027 大塚紫乃ゼミ 佐藤凜花

本論文は「こどもホスピス」の世界と日本の歴史を調べ、日本にある「こどもホスピス」の置かれている現状と利用者に対する具体的な支援と今後の発展について明らかにすることを目的としている。

「こどもホスピス」の歴史の始まりは、1982年にイギリスのオックスフォードで誕生した「Helen house」（ヘレンハウス）だ。若い夫婦の間に誕生し、2歳半で脳腫瘍を患ったヘレンという女の子をフランシス・ドミニカというシスターが預かったことが始まりとされている。フランシス・ドミニカはヘレンの家族のように、他にも病気を持った子どもの家族が大変な思いをしているのではないかと考え、イギリスに40箇所以上の「こどもホスピス」を広めていった。また、1995年にカナダ、2001年にはドイツ、2002年にはオランダと世界各地の「こどもホスピス」が誕生している。今では、中国、インド、オーストリア、スウェーデン、ロシアにも「こどもホスピス」の取り組みは広がっている。しかし、日本には民間団体が運営している「こどもホスピス」は大阪府鶴見区にある「TSURUMI こどもホスピス」、神奈川県横浜市金沢区にある「横浜こどもホスピス〜うみとそらのおうち」の2箇所しかない。『「こどもホスピス」をつくろう』としている団体は北海道、東京、福岡など全国各地で取り組みは広がっているが、実際に設立には至っていない。そのことから、日本における「こどもホスピス」がどのように広がっていくのかを具体的に考えることを問題としている。

今回「こどもホスピス」での取り組みや利用者における支援などもっと具体的に知るために、「横浜こどもホスピス〜うみとそらのおうち」を訪問し、施設の見学と理事長、保育士の2名にインタビューを行った。海外の「こどもホスピス」の構造を取り入れ、光が入りやすい大きな窓や部屋とお風呂を繋ぐリフトがあることを知った。全体的に落ち着いた雰囲気を感じることが出来、どこか1度訪れたことのあるような空気感があった。理事長、保育士のインタビューの回答から、利用者子どもや家族だけに留まらず、仕切りがなくフラットに入ることの出来るような雰囲気づくり、利用者子どもと地域の人々が緩やかに交流できるような施設でありたいと述べていた。

今後の課題としては、国からの支援が受けられていないため、企業や個人での寄付が多く必要となり「こどもホスピス」を建設するために莫大な費用と時間が掛かってしまうこと、「こどもホスピス」の言葉の定義化がされていないため、認知が広まっていけないことが挙げられていた。2023年の4月に国で新しく「子ども家庭庁」が設立される。「こどもホスピス」の窓口が設置され、今よりもっと円滑に「こどもホスピス」の増設がされることを理事長は願っている。

今回の研究やインタビューでは、まだまだ「こどもホスピス」の日本での発展には課題も多くあるが、可能性があると感じられた。今後、保育士として子ども達と関わっていく中でも、何かしらの形で、「こどもホスピス」との関わりを持ちたいと考える。

